国立大学法人
滋賀医科大学

情報提供

令和4年10月11日

レム睡眠行動障害における抑うつ状態の有病率に関する系統的レビューを世界で初めて報告 ―Sleep Medicine Reviewsに掲載されました―

角 幸頼助教

増田 史助教

滋賀医科大学精神医学講座の角 幸頼助教、増田 史助教、尾関祐二教授、角谷 寛特任教授らの研究グループが、レム睡眠行動障害(REM sleep behavior disorder、以下RBD)における抑うつ状態に関する系統的レビューを報告しました。

本研究では、3,576人の患者（男性2,871人、80.3%、平均年齢66.6±8.6歳）を含む31件の研究を分析し、RBDでは抑うつ状態の合併率は約30%と高いことが示されました。

RBDにおける抑うつ状態の有病率に関する系統的レビューは、世界初の試みです。

本研究成果をまとめた論文は、睡眠医学に関す医学雑誌である Sleep Medicine Reviews（ジャーナルインパクトファクター 11.401）に掲載され、2022年9月21日に公開されました。(https://doi.org/10.1016/j.smrv.2022.101684)

※レム睡眠行動障害（RBD）とは

寝ているときの夢に関連して、寝言や体が動く病気（睡眠障害）です。高齢者に多く、隣で寝ている人を叩いたり、ベッドから転落しけがをする場合があります。

パーキンソン病やレビー小体型認知症など神経変性疾患との関連も指摘されています。

滋賀医科大学医学部附属病院 睡眠センターでは、RBD患者さん専門の外来診療を行っています。

● POINT ●

- レム睡眠行動障害（RBD）との関連が指摘されているパーキンソン病やレビー小体型認知症では、高い割合で抑うつ状態を合併することが指摘されていたが、RBDにおける抑うつ状態の合併については明らかにされていなかった。
- RBDにおける抑うつ状態の有病率に関する系統的レビュー及びメタ分析は、世界初の試みである。
- RBDでは抑うつ状態の合併率は約30%と高いことが本研究によって示され、RBDの罹病期間が短い時点でより抑うつ状態が顕著であることは、特筆すべき結果である。
- RBDの罹病期間が短い時点でより抑うつ状態が顕著であることの背景には、レム睡眠行動障害の症状（夢を演じる行動）による苦痛や、将来の神経変性疾患への進展に関する不安や懸念が関係するのではないかと、研究グループは考察している。
- 研究成果をまとめた論文は、睡眠医学に関する医学雑誌であるSleep Medicine Reviewsに掲載され、2022年9月21日に公開された。

≪研究内容の詳細に関するお問い合せ先≫
滋賀医科大学　精神医学講座　角　幸頼、増田　史
TEL：077-548-2291
e-mail：hqpsy @belle.shiga-med.ac.jp

≪プレスリリース発信元≫
滋賀医科大学　総務企画課　広報係
TEL：077-548-2012（担当：岩品）
e-mail：hqkouhou@belle.shiga-med.ac.jp

研究の背景

レム睡眠行動障害（REM sleep behavior disorder、以下RBD)は、「夢を演じる行動」を呈する睡眠障害の1つです。特に暴力的な夢や恐怖感を伴う夢に関連して動いた場合、本人やベッドパートナーが怪我をする場合があります。

また、RBD はパーキンソン病やレビー小体型認知症など神経変性疾患との関連が指摘されており、RBD患者の多くは、長期の経過において神経変性疾患に進展する可能性も示唆されています。

パーキンソン病やレビー小体型認知症では、高い割合で抑うつ状態を合併することが指摘されていましたが、RBD における抑うつ状態の合併については明らかにされていませんでした。

そこで、角 幸頼助教、増田 史助教、尾関 祐二教授、角谷 寛特任教授らの研究グループは、系統的レビューと呼ばれる手法を用いて、RBD における抑うつ状態の合併率を調査しました。

研究の詳細

本系統的レビューとメタアナリシスでは、孤発性/特発性レム睡眠行動障害（isolated/idiopathic REM sleep behavior disorder、以下iRBD）患者におけるうつ状態及び関連症状の有病率について検討しました。

オンラインデータベース（PubMedおよびScopus）を系統的に検索し、ランダム効果モデルを用いて精神症状有病率のメタ解析を行い、95% prediction intervals（PI）およびI^2値を算出して異質性の程度を評価しました。

精神症状の重症度と、iRBD診断時の年齢およびiRBD発症からの罹病期間との関係を評価するため、メタ回帰分析を行いました。

3,576人の患者（男性2,871人、80.3%、平均年齢66.6±8.6歳）を含む31件の研究を分析した結果、うつ病の有病率は28.8%（95%CI 23.1-35.2%, 95%PI 8.1-65.1%, I^2 = 83.9%）であり（図1)、iRBDでは、うつ病スケールスコアと罹病期間の間に有意な負の相関を認めました（p = 0.012, β = -0.36, R^2 analog = 0.33, 図2)。

本研究により、iRBD患者におけるうつ病の高い有病率が明らかとなりました。

＊ 図1, 2 は論文より引用

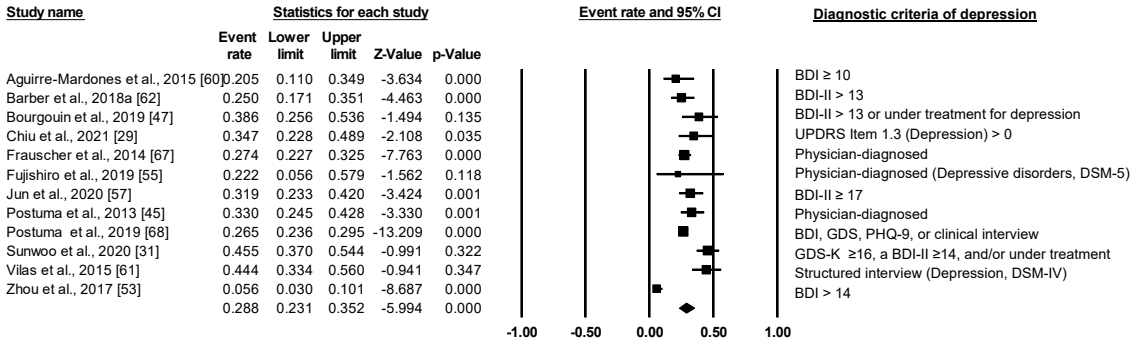

図1:孤発性/特発性レム睡眠行動障害における抑うつ状態の合併率に関するフォレストプロット

研究全体で、iRBD患者での抑うつ状態合併率は 28.8% と示されました（95%CI 23.1-35.2%, 95%PI 8.1-65.1%, I^2 = 83.9%)。

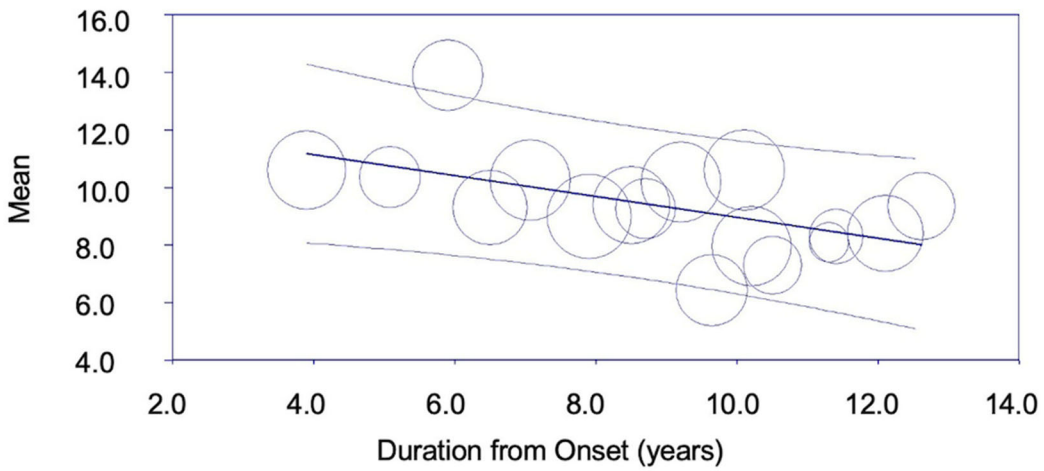

図2:孤発性/特発性レム睡眠行動障害における罹病期間(横軸)と抑うつ症状重症度(縦軸)の関係

RBDの罹病期間と抑うつ症状重症度は有意な負の相関関係にあり（$p = 0.012$, $\beta = -0.36$, R^2 analog = 0.33)、RBDの罹病期間が短い患者では抑うつ症状がより重度であることが示されました。

結論

結論として、RBDでは抑うつ状態の合併率は約 30% と高いことが示されました。本研究では、系統的レビューというエビデンスレベルの高い研究手法を用いた点において、研究の新規性および優位性があります。RBDにおける抑うつ状態の有病率に関する系統的レビューは、世界初の試みです。

特に、RBDの罹病期間が短い時点で抑うつ状態が顕著であることは、特筆すべき結果です。その背景には、RBDの症状（夢を演じる行動のことで、これにより本人やベッドパートナーが受傷することがあります。）による苦痛や、将来の神経変性疾患への進展に関する不安や懸念が関係するのではないかと、研究グループは考察しています。今後、RBD患者に対する心理的サポートがより重要になると考えます。

研究費

本研究は、日本学術振興会 科学研究費助成事業の助成を受けて実施されました。
（課題番号：JSPS KAKENHI Grant Number 21K15745 and 21H03851）

論文情報

著　　者：Yukiyoshi Sumi, Fumi Masuda, Hiroshi Kadotani, Yuji Ozeki,
タイトル：The prevalence of depression in isolated/idiopathic rapid eye movement sleep behavior disorder: A systematic review and meta-analysis,
掲 載 誌：Sleep Medicine Reviews, Volume 65, 2022,
(https://doi.org/10.1016/j.smrv.2022.101684)